熊本県

アスパラガスの元気な産地づくり

～若手生産者の収量アップに向けた支援～

活動期間：令和2年～（継続中）

概要

〇鹿本地域のアスパラガスは部会は平成8年に設立後、平成24年に生産者、栽培面積ともにピークを迎えたが、高齢化により生産者が減少しており、このままでは10年後に現状の約6割まで面積が縮小することが予想される。そのため、産地を守る後継者の育成が喫緊の課題。

〇そこで、次世代を担う若手生産者を対象に、①関係機関と連携した支援体制づくり ②個人ごとに適した栽培技術の徹底指導 ③集合形式での勉強会 を行い、生産者の早期自立を通じた産地の強化に取り組んだ。

〇その結果、①支援体制の強化による若手生産者の増加 ②栽培技術の高位平準化と収量の向上 ③若手生産者の交流機会の増加 につながった。

具体的な成果

1. 支援体制の強化による若手生産者の増加
   各生産者に合わせた指導を行い、若手生産者が増加。来作以降の新規定植者は3名と安定確保を実現。
   新規定植者 → 直近5年間で14名（R1～R5年）
2. 栽培技術の高位平準化と収量の向上
   R5年産の出荷量は、部会平均収量と同等以上を達成。**3,000kg/10a**達成する者や地域のリーダーとなる生産者の育成にも寄与。
   部会平均収量 1,540kg/10a → 対象者平均収量1,631kg/10a
3. 若手生産者の交流機会の増加
   若手生産者同士の交流する場は増えるとともに、**SNSを活用**することで、個々の悩みや栽培時の工夫を共有する生産者も増え、**更に部会が活性化**。

普及指導員の活動

令和2年～

- 若手生産者の育成のため、JA（指導課、地域担い手育成センター）や篤農家と連携した支援体制を構築。新規定植者に対しては相談会、**植え付け前の土壌断面調査**および座学講習会を実施することでスムーズな営農開始に向け、段階的な支援を実施。
- pFメータを設置し、土壌水分の**「具体的な数値」を意識したかん水管理を指導**。併せて、排水性が悪い生育不良のほ場では**縦穴暗渠を施行し排水性の改善**に取り組んだ。

令和4年～

- 新植～定植後3年目未満の生産者を対象にグループをつくり、勉強会や関係機関との意見交換会を開催し、**支援プログラムの強化**を図った。本勉強会のメンバーとJA技術員で**SNSを活用したグループを作成**し、各ほ場の状況や病害虫発生状況の共有化を進め、よりきめ細やかな指導を実施。

支援の流れ

Step 0
まず見る、プロから学ぶ
育成センター 研修
1年間の研修（農家受入れ）

Step 1
栽培の流れを知る
新規定植者向け相談会
前年の12月頃に開催

<相談会内容>
・栽培カレンダーの配布
・ハウス設計、準備資材の相談

Step 2
栽培を準備する
土壌断面調査
8～11月に実施

排水改善

Step 3
いざ定植！栽培を開始する
勉強会・巡回指導
翌年～

普及指導員だからできたこと

- 普及指導員が持つ**栽培技術力・指導力・コーディネート機能**を発揮できたからこそ、継続的で効果的な活動を展開することができた。
- 生産者、JA、研究機関、市とが一体となり取り組んだ結果、部会の活性化に繋げることができた。

熊本県

アスパラガスの元気な産地づくり
～若手生産者の収量アップに向けた支援～

活動期間：令和２年～（継続中）

１．取組の背景

鹿本地域のアスパラガスは、90 戸の農家が約 13.2ha を栽培する鹿本地域の主要作物である。アスパラガスの生産部会は平成８年に設立した後、平成 24 年に生産者、栽培面積ともにピークを迎えたが、以降、高齢化により生産者が減少している。さらには、定植後 10 年程度経過したアスパラガスは枯死株や生育不良株が現れ始め、かけた手間に見合う収益は上がりにくくなる。このことが定植後 20 年以上となる中心世代の引退に拍車をかけ、加速度的に産地が縮小している。このままでは、10 年後に現状の約６割まで面積が縮小すると予想され、産地を守る後継者の育成が喫緊の課題である。

そこで、次世代を担う若手生産者を対象に、①関係機関と連携した支援体制づくり、②個人ごとに適した栽培技術の徹底指導、③集合形式での勉強会を行い、生産者の早期自立を通じた産地の強化に取り組んだ（図１）

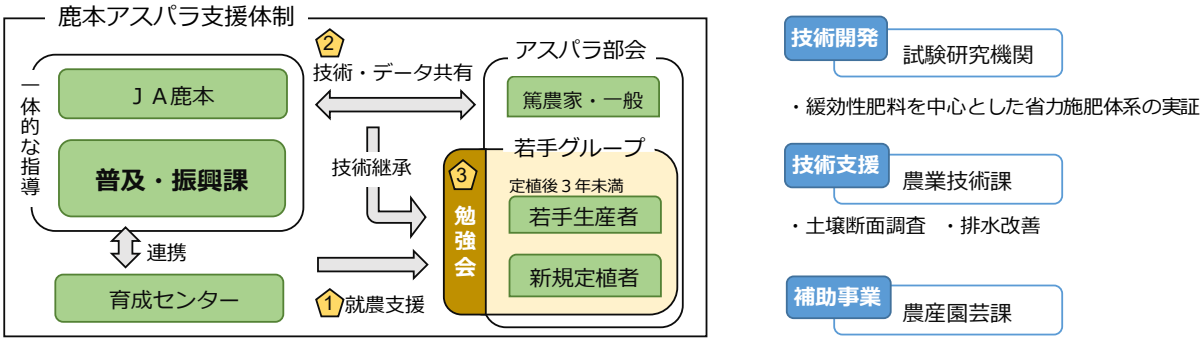

図１　鹿本アスパラ支援体制および普及推進を補助する県の後方支援体制

２．活動内容（詳細）

（１）関係機関と連携した支援体制づくりの強化

若手生産者の育成のため、ＪＡ（指導課、地域担い手育成センター）や篤農家と連携した支援体制を構築。普及・振興課がコーディネートを担当し、新規定植者に対しては相談会、植え付け前の土壌断面調査および座学講習会を実施することでスムーズな営農開始に向け、段階的な支援を行った。

（２）個人ごとに適した栽培技術の徹底指導

若手生産者は篤農家と比べて栽培の経験が浅く、かん水量やタイミングの判断が難しくなるため、ｐＦ メータを設置し（写真１）、土壌水分の「具体的な数値」を意識したかん水管理を指導した。併せて、土壌下層部に耕盤があり、排水性が悪い生育不良のほ場では、エンジンオーガを用いて縦穴暗渠を施行し排水性の改善に取り組んだ。

写真１　pF メータ（左図）
温湿度計（右図）

（３）新たな若手グループの活動および個別巡回の実施

令和４年から新たな取組みとして、新植～定植後３年目未満の生産者を対象にグループをつくり、勉強会や関係機関との意見交換会を開催し、支援プログラムの強化を図った（図２）。本勉強会のメンバーとＪＡ技術員でＳＮＳを活用したグループを作成し、各ほ場の状況や病害虫発生状況の共有化を進めると共に、当課で調査している篤農家（地区別、全５戸）の環境データ（写真１）についても共有し、梅雨・高温期のハウス管理の指標として活用した。加えて、「次世代総点検運動」の一環として、当課とＪＡの連携体制を強化し、若手グループの内３名を重点指導対象として定期的な巡回によりきめ細やかな指導を行った。

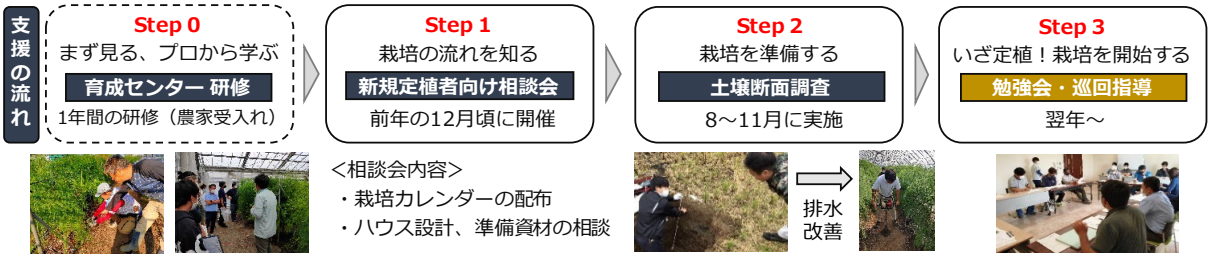

図２　鹿本アスパラ支援体制による新規定植者・若手生産者支援プログラム

３．具体的な成果（詳細）

（１）支援体制の強化による若手生産者の増加

支援体制の充実により、各生産者に合わせた指導ができたことで、新規定植者は直近５年間で１４名（Ｒ１～Ｒ５年）、来作以降の新規定植者は３名と安定確保に繋がった。中には、土壌断面調査の結果、土壌の排水性が悪くアスパラガス栽培に適さないと判断した例もあったが、別ほ場の選定を提案し丁寧な支援に取組んだ。

（２）栽培技術の高位平準化と収量の向上

ｐＦメータの設置により、かん水量やかん水頻度の改善が図られた。その結果、健全な茎葉の維持に繋がった。Ｒ５年産の出荷量は部会平均収量が1,540kg（10a 当たり：以下省略）に対し、対象者の平均収量は 1,631kg と同等以上の生産量を達成した。中には就農４年目で、部会の目標収量である約3,000kg を達成する者もおり、後に続く新規定植者のモデルとなり、将来の地域のリーダーとなる生産者の育成にも繋がっている。

（３）若手生産者の交流機会の増加

新たなグループ活動により、地区ごとの現地検討会に加え、勉強会（写真２）が増えたことで若手生産者同士の交流する場は増えている。また、ＳＮＳを活用することで、個々の悩みや栽培時の工夫を共有する生産者も増え、コロナ過で活動が制限される中、活性化が図れた。

写真２　若手勉強会の様子

４．農家等からの評価・コメント（ＪＡ鹿本　藤本係長）

関係機関が一体となって若手生産者の支援の体制づくりを強化したこと

が、着実に成果につながっていると感じている。今後も取り組みを継続して、産地の維持・発展に努めていきたい。

５．普及指導員のコメント（鹿本農業普及・振興課　技師　宮本）

若手生産者を中心に活動を行ってきた結果、若手生産者が着実に増加しているとともに、栽培技術の高位平準化と収量向上も図られている。今後も若手生産者の交流の場を設定し、益々活気のある部会になるよう支援を続けたい。

６．現状・今後の展開等

継続的な支援から若手生産者の栽培技術は年々向上しており、一部の生産者は令和５年度から県試験研究機関と協力し、「緩効性肥料を中心とした省力施肥体系の実証」にも取り組んでいる。また、新たにＪＡ鹿本地域担い手育成センターの研修品目にも位置づけられ、次年度は就農希望者を対象とした体験バスツアーを計画しており、アスパラガス産地としての維持・強化に精力的に取り組んでいく。

栽培指導面においても、篤農家の事例紹介や個別巡回等を通して安定多収技術が部会全体へ浸透し、産地の収量向上につなげられるよう働きかけを続けていく。